

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 40 2016.3

特別寄稿	
新渡戸稲造と札幌遠友夜学校（第4回） 藤田 正一	1
着任挨拶	
着任のご挨拶 山下 俊介	8
博物館訪問記	
つきさっぷ郷土資料館 末永 義圓	9
活動報告	
菌類標本ボランティア活動報告 石田 多香子	10
移動後のポプラチェンバロと、エレナさんのその後 石川 恵子	11
ヤップ島からの手紙 久末 進一	12

特別寄稿

新渡戸稲造と札幌遠友夜学校（第4回）

北海道大学獣医学研究科名誉教授 藤田 正一

前回、新渡戸が札幌遠友夜学校で揮毫し、また、それについて語った「学問より実行」に付いて述べ、この言葉の背景に札幌農学校流の教育観があると述べた。そして、その札幌農学校の教育思想の根幹にあるものとして、クラーク博士の Boys, Be Ambitious という言葉の北大の解釈について触れた。大志の目標として「**金銭や私利私欲や、人が名声と呼ぶようなはかないものに対してではなく、知識や正義や人々の向上のために、そして、人としてのあるべき究極の姿に到達できるように、青年よ大志を抱け。**」というもので、これは当時の青年の生き方の指針であった富や地位や名声を目指せとする「立身出世」に代わる、青年の気高い生き方を示した北大の教育思想であった。ところが、この北大の解釈を、「後付けで、クラーク博士の真意ではない」と言う人もいる。Boys, Be Ambitious は「頑張れよ」程度の軽い意味だとか、「野心を持って」「立身出世せよ」という意味だとか様々な解釈がある。「立身出世せよ」では北大の解釈と正反対で元も子もないが、その根拠とされるのがクラーク博士の札幌農学校開校式辞

の中の言葉である。確かにクラーク博士は立身出世を否定はしていない。が、それを人生の目標にせよとは言っていない。翻訳ではなく、原文を見てそのニュアンスを正確に汲み取るべきであろう。このことについては後で詳述する。

そればかりか、Boys, Be Ambitious などと米国人の前で言ったら「『男ども、頑張っている女をゲットしろ』と言う意味に取られる。」などしたり顔に言う、どこぞの教授もいる。男女共学の場で Boys と限定して言ったと想定すると、そういうジョークも言いたくなるのだろう。が、当時の札幌農学校では男子しかいなかったので Boys と呼びかけたまでである。ジョークをジョークと受け取れず、これを米国人のまともな反応であると人前で言うてしまうことで、おとしめているものは自分自身であることに早く気づいてほしいものである。

因に、Be Ambitious, Aim High（大志を抱け、高きを目指せ）とは2006年に英国元首相メジャー氏がワシントン大学セントルイス校の卒業式で行った演説の中で使われた言葉である。巣立ち行く

若者に対するはなむけの言葉として、励ましと期待を込めて発した言葉である。クラーク博士も別れに臨んで、前途ある若者達に向かって「志高くあれ」と言い残した。この短い言葉にクラーク博士は何を言いたかったのか、何を高い志の対象としろと云いたかったのかを前回紹介した北大の解釈は示している。

言葉は、どのような状況下で、誰が発したかによって意味合いが異なる。言葉はそれを発した人のそれまでの人生を背負っている。クラーク博士がどのような人物であるかを見ずにこの言葉の解釈も成り立たない。そこで、クラーク博士がこの言葉を発した時点以前のクラーク博士の生き様を見てみることにしよう。新渡戸は「札幌は私の精神的誕生地である」と語っているが、信仰を含め、新渡戸の精神的成長に大きな影響を与えた札幌農学校の教育精神の基がクラーク博士の精神にあるのであるから、これを語ることは本稿の主題から大きく外れることではあるまい。

クラーク博士生誕地の土地柄

クラーク博士は 1826 年マサチューセッツ州アッシュフィールドに生まれた。マサチューセッツ州と云えば、17 世紀にイギリスから自由を求めてメイフラワー号に乗って渡って来たピューリタン（清教徒）が上陸し定住したニューイングランド諸州の一つであり、アメリカ独立戦争発祥の地である。クラーク博士が生まれた当時は独立戦争の余韻いまだ覚めやらず、自由と自主独立の精神がこの地に満ち満ちていた。内村鑑三はクラーク博士の Boys, Be Ambitious とこの地について以下のように語っている。

「クラーク先生がこの言を発せられるにいたった経路を考えますに、先生の生国すなわちニューイングランドはこの精神が満ち満ちていて、その精神的環境の中からブライアント、ソロー、エマーソンの如き偉人を産み、また先生を産んだのであります。そのニューイングランドのピューリタンの意気が先生を通してこの言葉（=Boys, Be

Ambitious）となったのでありまして、この簡単な言葉の背後に全ニューイングランドが在ると考える時に、これ実に意味深い言葉となるのであります。札幌の今日あるを得たのはクラーク先生を通して、ニューイングランドの気風が大いに貢献したのだと思うときに札幌はいっそう貴いものになります。」

内村鑑三言う所の「ピューリタンの意気」即ちピューリタンの精神とは、17 世紀中頃、日本で云えば江戸時代に英国ピューリタンが主張した精神で、国民主権、平等選挙、信仰の自由、言論の自由、法の下での平等の諸権利は生得の権利（自然権）であり、国王あるいは議会の権威の源泉は国民による自然権の信託（=国民と国王との契約に基づく）であるというものであった。これがロックの民主主義思想の基本であり、アメリカ独立宣言の思想的背景となった精神である。そして、クラーク博士によってもたらされた札幌農学校の民主主義的教育の背景となり、そこで学んだ者達が教鞭をとった遠友夜学校にも強い影響を与えた。

クラーク博士が学んだ高校

クラーク博士の通った高校は、クルミボタン製造で財を成したサミュエル・ウイリストンが自分の工場で働くような労働者やその子弟にも教育が必要であるとして設立したウイリストン・セミナリーという高校であった。アメリカでも当時、労働者階級には教育は必要ないと言う風潮が強かったのである。クラーク青年はここで学び、植物採集に没頭するなど、イーストハンプトンの豊かな自然に親しんだ。後に彼は大学をアマーストに誘致することに成功するが、その大学を農科大学（マサチューセッツ農科大学）としたことと、ウイリストン・セミナリーの労働者階級にも等しく教育が必要であると言う思想とは無関係ではなからう。因にクラーク博士の妻はウイリストンの養女である。社会的階層に関わり無く教育は必要であると言うこの考え方は札幌農学校で学んだ生徒達に引き継がれ、遠友夜学校での教育のモチベーションとなって行った。

クラーク博士が学んだ大学

クラーク博士の学んだ大学を語る前に、アメリカには2種類の大学があることを紹介したい。その一つは北大のようないわゆる研究大学であり、大学院を擁し、研究に重点を置いた大学である。もう一つはリベラルアーツ・カレッジで、少人数で教授と学生が顔と顔を突き合わせて対話しながら幅広い分野の教養を身につける、全人教育を行い人格の養成を目指す大学である。クラーク博士が学んだアマースト大学は後者のリベラルアーツ・カレッジで、現在でもこのカテゴリーの大学で全米1、2位にランクされる著名な大学である。札幌農学校でクラーク博士が組んだカリキュラムに全人教育科目が多いのはこのためである。

このような教育方針は日本の旧来の藩校や寺子屋などで行われた「人を作る教育」と相通ずるものがあり、札幌農学校の生徒達に違和感は無かったはずである。新渡戸や内村の「人格の完成を目標とする教育」の主張はこのような東西相通ずる教育思想によるものであろう。

クラーク博士はアマースト大学で鉱物化学に興味を持った。近隣の山を巡って鉱石標本を集め、これを売って学資の足しにしたと言う。彼は医者の子ではあったが経済的には恵まれていなかった。彼はこの大学在学中、自らの信仰心の薄さに苛まれ、劇的なキリスト教の回心（かいしん＝conversion）を経験し、より敬虔な信者となる。

留学とオオオニバスの花

クラーク博士はこの大学を卒業すると、ドイツのゲッチンゲン大学に留学し、隕鉄の化学の研究で博士号を取得し、アマースト大学出身者で最初の博士号取得者となった。留学のためにゲッチンゲンに向かう途上、ロンドンに立ち寄り、その時たまたま目にした新聞記事に刺激されて、栽培50年にしてようやく開花したというオオオニバスの花を見るためにキュー王立植物園を訪れる。ここでこの花を見て、高校時代に夢中になった植物への興味が再び呼びさまされた。それは、大学で得た鉱物に関する知識を使って、当時ゴールドラッシュで湧いていた西部で一山当てたいと言う卑俗



アマースト大学チャペル



クラーク博士の胸像の台座にオオオニバスのレリーフ

な野心から、留学を終えて米国に帰ったら、植物学の研究に身を転じ、このような温室を造ってこのような花を咲かせてみたいと思うようになる、神の啓示に打たれたような経験であった。

「この出来事は私の人生のプランを一変させました。実は私はアメリカ西部の鉱山地帯で富を築こうと考えておりましたが、そうする代わりにアマーストで教鞭をとることにしたのです。従って、私と農科大学との結びつきは、私が植物学を志すように与えられたこの出来事の結果に他なりません。．．．この農科大学で私の指導の下に成就したものがあるとすれば、それはキュー王立植物園に負っているのです。」

北大中央ロウンの傍らに立つクラーク博士の胸像の台座にオオオニバスのレリーフがあるが、このことを物語っているのだ。

ドイツ留学中クラーク博士は隕鉄の研究の傍ら植物学の知識も身につけたのである。博士は博士号を取得して帰国すると、アマースト大学の教授となり、鉱物学、そして生物学と化学を担当する。この時、新島襄を教えている。

南北戦争に出征

前述のように、クラーク博士は札幌に来る15年程前、南北戦争が勃発すると、リンカーンの奴



血染めのマサチューセッツ義勇軍第二十一連隊旗



軍服のクラーク大佐

隷解放の呼びかけに呼応して教壇を去り、北軍の兵士として出征している。彼はそのときの活躍から准将の地位をオファーされるが、それを蹴って、自らの使命と信ずる教育研究の道に戻ることを選んだのである。このことについては、一期生伊藤一隆に次のような文章がある。

（南北戦争にマサチューセッツ義勇軍第二十一連隊を率いて出征したクラーク博士は）「1862年9月1日のシャンティリーの役 (Battle of Chantilly) では、敗退する北軍の殿軍（しんがりを守る軍）を承はって健闘しているうちに孤立無援となり、クラーク大佐戦死の報が家郷に伝わって家族は勿論、衛戍（えいじゆ：軍体が常時駐屯して警備する）地の住民達は一同半旗を掲げてその喪に服したとのことであるが、本隊を見失ったクラーク連隊長は僅少の手兵をひっさげて幸運にも危地を脱し、兵器兵員の補充を行って再び戦線に復帰した。

この大戦争が遂に北軍の勝利に帰して名誉の義勇軍第二十一連隊が凱旋の途に就いた際、政府は論功行賞の意を以て先生を陸軍少将に進級させる内命を伝えたが、先生は即座にそれを拒絶した。陸軍少将は終身官でこの恩賞は異数の抜擢である。然しクラーク先生の拒否は実に見上げたものであった。

曰く 『自分は純然たる学究である。軍人や政治家などになる意思は毛頭無い。然し国家危急の際であったから、見るに忍びずして剣を執ったのに過ぎぬ。若し再びかかる危局が迫るならば、自分は再び少尉として従軍するを辞さぬ。戦終結し

た今日、陸軍少将と申す地位は名誉至極であるかも知れぬが、予は学究に復帰するのが当然と考える』

この一事は先生の人格を偲ぶゆかしい事柄であると思うが、明治19年、予が水産調査の官命を帯びて渡米した際、思いがけなくもボストン市庁舎に飾られてある南北戦争当時の北軍の連隊旗の中に、マサチューセッツ義勇軍第21連隊の旗竿ばかりになっている連隊旗を発見し、恩師クラーク大佐健闘の状況を想起して、感涙滂沱（かんるいぼうだ：涙がとどめなく流れる）たるを禁じ得なかった」

単なる野心家であれば飛びつきそうな、地位も名誉も、相応の富も約束されたオファーを惜しげも無く断り、自らの使命と信じる道に進んだ。彼の言葉、Boys, Be Ambitiousの北大の解釈そのままの生き方であった。少なくとも、その時から、札幌に来て青年達に燃える教えを授けて帰国した時までのクラークの生き様は、「大志を抱け」の北大の解釈を裏付けるような生き様であったといえる。いや、そのような生き様であったからこそその解釈であろう。

学究に戻ったクラーク博士

アマースト大学に戻ったクラーク博士は、教育研究にいそむ傍ら、合衆国政府の方針（モリル法）により各州に設立されることとなったランドグラントユニバーシティー（土地付与大学）をアマーストの地に設立するよう州政府に呼びかけ、誘致活動を強力に推進し、ついに誘致に成功する。

そして、彼はその大学（マサチューセッツ農科大学）の第三代目学長となる。三代目とは言っても、実際に学生を受け入れ教育をスタートさせたのはクラーク博士で、事実上の初代学長であった。彼は農民の子弟にも大学教育が必要であることを説き、科学的農業を教えた。この頃彼は全学を巻き込んで有名な樹液の研究とカボチャの浸透圧の研究を行っている。科学的な手法で植物生理学上の現象を解明した研究として当時高く評価された。後に内村鑑三がアマーストを訪れた際に、「あのクラークが植物学を教えただって？」と嘲笑する人がおり、内村はクラーク先生もだいぶ化けの皮がはがれて来たと書いているが、嘲笑した本人も、これを聞いた内村もクラーク博士の植物学への造詣の深さとこのような研究業績については知らなかったのであろう。クラーク博士の教え子で彼とともに札幌農学校教師として招聘されたペンハローは帰国後、著名な植物学者となるが、クラーク博士の農学に於ける貢献を論文の中で「科学的農業の基礎を築いた」と評価している。

この頃マサチューセッツ農科大学でクラーク博士から直接教えを受けた生徒達の卒業してからの回想がある。「クラーク博士は若く、活気にあふれ、その語りは力強く、精力的な管理者であると同時に才気に富んだ素晴らしい先生だった。より科学的な農業へと生徒の関心を刺激し、それに必要な強い興味と好奇心を彼らに抱かせた。」「クラークは活力あふれる指導者で、我々の時代、まぎれもなく我々学生たちのヒーローであった。」

札幌農学校で教えを受けた一期生達に読ませれば、まさにその通りと云うであろう。クラーク博士の教え子で、ペンハロー同様彼とともに教師として札幌に来たホイラーが札幌農学第二年報に「クラーク教頭の靈感的なる行動を想起することは、博士の日本滞在中、彼と接触せる学生および同僚の胸中に、自ら発奮努力の氣象を湧出せしむべき源泉たるべし」と記しているのを見ても、彼の生き様そのものが Be Ambitious のメッセージであったと言えよう。

クラーク博士札幌農学校教頭となる

さて、北海道開拓使はこのマサチューセッツ農科

大学の学長であったクラーク博士を現職のまま札幌農学校の教頭に招聘しようとしたのである。アメリカの大学の学長を東洋の一小国日本の片田舎の農科大学の、それも学長ではなく、格下の教頭に迎えようと云うのである。ここで開拓使は日本語の「教頭」を President と英訳した。President といえば学長である。さすがに錦の御旗をでっち上げて自らを官軍とした薩長政府の頭の柔軟さである。クラーク博士は「現職の学長が2年も大学を留守にするわけにはいかない。1年でよければ行こう。私は1年で2年分の仕事をする所存である。」ということで1年間の招聘に応じたのである。

1876年7月31日、クラーク博士の50歳の誕生日に博士一行は札幌に到着。クラークの荷物の中には米国より持参した諸々の身の回りの品の他に、ワイン4ダース、横浜で購入した聖書50冊があった。

開拓使長官黒田清隆は札幌に向かう玄武丸船上でクラーク博士に生徒の徳育を要請する。クラーク博士は待ってましたとばかりに、「心得た。そのために既に聖書を準備してある。」と応じたものだから、黒田はびっくり。「官立大学でつい最近まで禁じられていたキリスト教を教えるなどもってのほかである。」「宗教なしに道德など教えられぬ」と大論争になった。キリスト教国では宗教教育こそ道德教育の基本である。新渡戸稲造がドイツ留学中ベルギーの法学者ド・ラブレール教授に「貴国では宗教教育は行わないと言うが、では、どのように道德教育を授けるのですか」と聞かれて答えに窮し、それに答えるために執筆したのが『武士道』であった。こと程左様にキリスト教国では宗教教育と道德教育は切っても切れない関係にあると考えられていたのである。クラーク博士の主張も無理からぬことであった。

後にクラーク博士がよく学生をコントロールし、教育効果を上げているのを見て、黒田清隆は聖書の使用を黙認する。これによりキリスト教を知った学生達のほとんどが改宗し、信者となる。世に言う札幌バンドの誕生である。信者となった者もならなかった者もキリスト教的良心の教えは彼らの血となり肉となった。

クラーク博士の札幌農学校開校式辞

1876年8月14日、開拓使長官黒田清隆列席のもと、まばゆい白亜の校舎の前でクラーク教頭は式辞を述べる。その一部に以下のような下りがある。振り返ってみると、このとき既にクラーク博士の教育精神と方針がこのスピーチの中に見事に表現されていることが分かる。

「長年にわたり、東洋の国々を暗雲のごとく包んでおりました、排他的階級制度と、因習との暴政から、貴国がかくも見事に開放（＝自由を獲得）されたことは、教育を受けんとする学生一人ひとりの胸のうちに 高邁なる志 (a lofty ambition) を目覚めさせずにはおきません。若き紳士諸君 (young gentlemen)、諸君の忠実にして有効なる奉仕をおおいに必要としている諸君の祖国において、労働と信頼の最高の地位と、それに伴う名誉とに値する人物になるよう諸君一人一人が自ら精進することを望むものであります。諸君は健康を保ち、欲望と情欲を抑制し、従順と勤勉の習慣を身につけ、これから学ぶ諸科学に関するあらゆる知識と技術とを獲得するように努めなさい。諸君は誠実で、聡明、そして精力的な人材が常に求められる重要な地位に就くにふさわしい人間になるように自ら精進してゆくわけではありますが、そのような人材は、他の全ての国における同じように、この国においても供給が需要を満たすことが出来ないことが常態化しているのです。」

労働者や農民の子弟などの社会的階層に関わらず教育が必要であるという教育思想を持ち、また、奴隷制度に反対したクラーク博士は明治維新による身分制度の廃止と人々の解放を高く評価し、自由の獲得によって学生たちは高邁な志 (a lofty ambition) を胸に抱くことが出来ると述べている。8ヶ月後、別れに臨んで発した言葉 Be Ambitious の伏線のようなものである。更に、学生たちに若き紳士諸君と呼びかけて、学生達を紳士として遇することを示している。このこともまた、後に、こまごまと書かれた校則案を示されて、「こんなことで人間が作れるか、Be Gentlemen の一言で十分だ」といってそれを破り捨てたクラーク博士の行動の



開校式当日の札幌農学校校舎

伏線のようなものである。そして、「若き紳士諸君、労働と信頼の最高の地位と、それに伴う名誉とに値する人物になるよう諸君一人一人が自ら精進することを望む」 (Let every one of you, young gentlemen, strive to prepare yourself for the highest position of labor and trust and consequent honor)、「誠実で、聡明、そして精力的な人材が常に求められる重要な地位に就くにふさわしい人間になるように自ら精進してゆく」 (Thus you will prepare yourselves for important positions, which are always in waiting for honest, intelligent, and energetic men) と、2度に渡って出て来た表現：「値する人物になるように」 (to prepare himself for ~ : 自身を~のために準備する、即ち自身を~に値する人物にする) と言う所に着目する必要がある。「高い地位や名誉を得るように」では無く、「それらに値する人物になる」ことを目指して努力せよと言うことである。まさに、Be Gentlemen のエピソードとともに、人間を作る教育を考えていたことが分かる。

札幌農学校精神の醸成

この後、学生たちはアメリカに於けるリベラルアーツ大学に於けるように、クラーク博士やアメリカ人教師達と親しく交わり、学問的、道徳的感化を受けて行くことになるのである。クラーク博士が帰国した後もクラークの教え子のホイラー、ペンハロー、ブルックス、カッターなどの若い米国人教師がクラーク博士の教えを引き継いで教育にあたった。ここに、クラーク博士とその弟子達の札幌農学校における教育精神についてまとめてみよう。

・大志 (lofty ambition) を抱け：金や地位や名声ではなく、人々の向上のための大志、人格の完成

を目指せ

- ・人間を造るリベラルな教育：人格主義、クラーク博士が卒業したアマスツ大学のリベラルアーツ教育の影響

- ・民主主義：「国民が第一、国は最後。一流の国家は国民に奉仕するを旨とす」（ホイーラー）

- ・自立した自律的な個の確立を求める：Be Gentlemen、自立自制責任感

- ・自由が大志を抱かせる。自由が gentleman を作る。（アメリカ独立宣言起草者トーマス・ジェファソンの「自由が学問と道徳の生みの親である」と同じ考え）

- ・個人の尊重と民主主義：生徒を young gentleman として扱う。ホイーラー：「全ての自由国家では重要とすべきは国民が第一、国は最後」

- ・自主・独立の精神：アメリカ独立宣言の精神

- ・博愛の精神：キリスト教；ピューリタン精神より

- ・平等：社会的階層に関わらず教育は必要（平等、機会均等）

- ・弱者の側に立つ視点：キリスト教；ピューリタン、クラーク奴隷解放のため南北戦争従軍

- ・正義を主張する不屈の精神：クラーク南北戦争従軍、ペンハローの正義の主張、新渡戸のバンフでの演説

- ・勤労の重視：勤労は札幌農学校の午後の日課

- ・平和主義：新渡戸稲造、内村鑑三の平和主義と国政を批判出来る愛国心

- ・机上の学問より実践の重視：新渡戸稲造「学問より実行」

- ・実学：学んだことの社会への還元。実践の学問、困っている人々の役に立つ学問：りんご博士島善鄰、いもち病研究の伊藤誠也など近年のいわゆる拝金主義的実学とは目的とするところが異なる。

- ・現場主義：ホイーラー「自然に学べ」

- ・暗記より思考力を：ホイーラーやブルックスの言葉

これらが札幌農学校の人間を作る教育の基本的な精神であった。武士道精神のもとに成長した日本の若者がこのような精神に暴露され、時代の雰囲気もあってこれらをむさぼるように吸収して行った。これらの精神が武士道精神の上に継ぎ木され、独特の札幌農学校精神となって行ったのである。

元北大予科教師蝦名賢造が次のように書いている：「新渡戸稲造夫妻の札幌に残したもっとも美しい、高貴な遺産の一粒は、このささやかな札幌遠友夜学校であった。それは新渡戸をふくむ札幌農学校全体の教育精神そのものの体現ともいうべきものであり、また逆に農学校全体にヒューマンイズムの精神を注入することにもなった。」遠友夜学校は新渡戸を始め、ボランティアで教師を務めた農学校生徒達の札幌農学校精神の実践の場であった。

大志の喪失

初期札幌農学校には、己を利するよりは万民のために、国益よりも国際正義のために力を尽くし、支配する側よりも支配される側の、強者よりは弱者の側の立場に立って、自らの保身を顧みず、彼らの救済と正義を堂々と主張する人々を生んできた清き精神の流れがあった。初期札幌農学校の教育は政権に対してもはっきりとものをいう人格を育てた。政権はこれに対し不満と警戒感を持ち、幾度と無くこの学校をつぶそうとした。校長となった一期生佐藤昌介の必死の努力でその危機をことごとく乗り越え、帝国大学となるのだが、学校の存続を担保に札幌農学校の「人間を造るリベラルな教育方針」は転換をせまられる。北大は政権の意向に従い、キリスト教色、自由主義色を排し、国家主義型教育へと舵を切ったのである。以降、初期の農学校が輩出したような堂々たる人物は輩出されなくなってしまった。「自由こそが学生たちの胸に大志を抱かせる」（クラーク博士の最初の演説）、「自由こそが学問と道徳の生みの親である」（トーマス・ジェファソン）のだが、自由なき統制型教育のもたらしたものは大志の喪失であった。

札幌農学校-北大の本体の辿った歴史はこのような有様であったが、遠友夜学校はそれが閉校とされる1944年まで、初期の教育方針を貫いたのであった。大学の体制や教育方針の変化にもかかわらず、学生の間に残った札幌農学校精神の実践はこの遠友夜学校において細々と受け継がれて行ったのである。〈続く〉

着任挨拶

着任のご挨拶

総合博物館 教育・メディア研究系 山下 俊介

みなさま、こんにちは。7月に総合博物館教育・メディア研究系に着任した山下俊介です。

私の専門は研究資料のアーカイブ、特に映像資料のアーカイブです。アーカイブについては、NHKアーカイブスやデジタルアーカイブ、あるいは文書館など、耳にされたことのある方も多いのではないのでしょうか。私が取り組んできたのは、研究者の残した写真や映像、音声、フィールドノート、講義ノートなどを体系的に保存・管理し、新たな教育・研究に活用していく、というものです。もちろん過去の資料だけではなく、現在進行形の学術活動の実際の営みをどのように映像に残していくかも大事な仕事だと考えています。

映画保存の世界でよく言及される「3C」というものがあります。映画を残すために必要とされる3つの要素、Contents(内容;映画であればフィルムに写されている事物や情報)、Carrier(媒体;つまり物質としてのフィルムですね) Context(文脈;たとえば、どんな環境でどのように上映されたか)の頭文字を指しています。映画をただ単にデジタル化してデータを保存したとしても、それは一つ目のC、つまり内容の複製を行ったにすぎず、映画全体の保存に対しては不十分だということになります。2つ目のCの価値(モノの価値)については、モノを扱う博物館においては、言わずもがな、ということでしょうか。3つ目のCについては、フィルム以外の関連するアーカイブズ資料、例えば上映チラシや製作台本、新聞記事などから復元することができます。モノにまつわるコトの部分といえは理解しやすいと思います。

仮にこの3Cをできる限り完全に保存できたとしても、なお問題は残ります。上映された映像がどのように受けとめられたかについては、受け止める側の身体や感覚、環境の時代的な変容もあるので、いま現在からその場、その時を自分の身体をもとに想起するしかありません。

3つのCの保存は、想起するための材料をでき



フィルムを点検する筆者(撮影は高橋一葉さん)

るだけ丁寧に残しましょう、ということであって、最終的にはそれらの情報を総合し、想起する人が居なければなりません。こうした想起する人のコミュニティ(Community)まで含めて、保存に不可欠な4Cとして認識する必要があるのではないかと考えています。

博物館ボランティアのみなさまには、総合博物館の種々の資料の整理や展示解説などにご尽力頂いており、博物館スタッフの一員として心から感謝申し上げます。また同時に、ボランティアのみなさまはモノを整理し、コトを紡ぐ活動の中で、さまざまな物事を想起し、思索する実践に取り組まれている、加えてそうした実践者のコミュニティを形成し、維持・継続、発展させるもうひとつの実践にも取り組まれていらっしゃると思います。改めてみなさまの活動に敬服いたします。

翻って、アーカイブというのは、ある個人や組織体の活動の記録を指します。今回、ボランティアニュースのバックナンバーを読み通してみても、個々の興味深い記事内容はもとより、ボランティア活動の総体がそこにアーカイブされていると感じました。このアーカイブが伝える雰囲気にあこがれて、ボランティアに参加したいと思われる方もきっと多いのではと思います。私もコミュニティの一員として、みなさまとともに北海道大学総合博物館をさらに発展させてまいりたいと思っております。

博物館訪問記

つきさっぷ郷土資料館

化石ボランティア 末永 義圓

第 21 回博物館に押しかけよう会は札幌の戦争遺跡である「つきさっぷ郷土資料館」であった。平成 27 年 10 月 31 日 (土) 午前 10 時に 12 名が正面玄関に集合。場所は札幌市豊平区月寒東 2 条 2 丁目、電話 011-854-6430 である。

開館期間は 4 月から 12 月第 1 週までの水曜日と土曜日の午前 10 時～午後 4 時 (冬季は閉館)。

アクセス：地下鉄東豊線「美園」駅を出て、福住方面へ 2 丁程進み、信号機で北へ左折し、白石・中の島通りを進み、約 500m で国道 36 号線に達し、信号を更に進み、右側の月寒高校を北へ 500m、左側のポプラ並木の巨木に囲まれたレンガ造りの外壁が重厚感を漂わせた建物が目的の「つきさっぷ郷土資料館」である。この建物は 3 世代にわたって、それぞれ別な用途目的で使用されてきた。

第一は旧陸軍北部軍司令官官邸として昭和 16 (1941) 年に完成し、終戦まで使用されてきた。

第二は終戦後の或る時から北海道大学の学生寮として使用されてきた。筆者は昭和 32 (1957) 年 4 月から昭和 34 年 3 月までの 2 年間に在籍し、当時の寮生は全部で 22 名であった。当時の建物は玄関を含む前半分が洋式で 15 名が居住し、5 人部屋が 1 室、4 人部屋が 2 室、2 人部屋が 2 室、1 人部屋が 2 室の 7 室であった。後半分は和室で 7 人が居住し、3 人部屋が 1 室、2 人部屋が 2 室の 3 室であった。そこには管理人夫妻が住み、東側に食堂があった。

第三は昭和 60 (1985) 年で、北大の既存の全ての寮が廃止され、大学内に統合されて新寮ができることになった。この様にして、月寒学寮も閉寮となり、ここに新たに「つきさっぷ郷土資料館」が誕生した。

この折に建物の和室の部屋や管理人部屋はすべて撤去された。洋室は 4 つの展示室 (農耕具、軍隊関係、古文書、民具) となった。展示は内容豊富で見応えがある。きちんと整理され、きれいに保存されている一つ一つの展示品に地元のボラン

ティアの皆さんの郷土への誇りが感じられた。

この建物の歴史的変化について、巨大化したポプラ並木は顕著な驚きを感じ、一方では静かに眺めている様である。

もと寮生の末永さん
(撮影は星野フサさん)



「月寒学寮」での思い出

前述した様に、筆者が月寒学寮に滞在した期間は、昭和 32 年 4 月～昭和 34 年 3 月の満 2 年間であった。当時のことは、今から 50 余年前の昔のことであり、殆ど忘れてしまった。

この寮は、当時北大から最も遠距離に位置していたが、五番館 (現在は空き地) 横から中央バスの始発があり、途中 36 号線経由で、通学には比較的交通の便が良かった。

寮の食事は管理人の長谷川さん御夫妻に大変お世話になった。月 1 回だけ夕食は寮生が交代で当番制となっており、その日は管理人の定休日となっていた。寮生のレジャーとしては囲碁、マージャン、中庭のガーデンゴルフが主なものであった。月寒町の繁華街にアポロという喫茶店がありクラシック音楽を楽しんだ。ここにはテレビが設置されており、当時話題となったフランキー堺主演の「私は貝になりたい」を寮生の多くが見て涙した。

また、映画館では五味川純平作「人間の条件」が大きな話題となっていた。

その後、寮の仲間の中で、教育学部 (E・H 氏)、理学部 (I・F 氏)、獣医学部 (S・Y 氏) の 3 名で、エンゲルス著「反デュリング論」(村田陽一訳、大月書店) の読書会を行った。個人で読んだら大変難解であったが、3 人で楽しく読み続けることができた。

幸運にも、月寒学寮へ来て充実した学生生活を送ることが出来た。

活動報告

菌類標本ボランティア活動報告

菌類標本ボランティア 石田 多香子

これまで歴代研究者の膨大な標本の整理は小林孝人先生指導の下、北海道大学総合博物館標本庫の分類、「菌類」のラベルにラテン語の学名、和名、採集地、生育環境、採集者、採集年月日、同定者を記入する作業を行ってきました。

作業は小林先生、先輩の鈴木さん、学生の矢部さん等が古い標本を読み取り、上記ラベルに転記したものを石田以下新人が標本袋用紙を封筒状に折り、ラベルをのり付けし、標本及び元記入ラベルを納め完成させていました。

2013年7月より小林先生が沖縄琉球大学への勤務が決まった時、先輩の鈴木さんは東京へ転居され、学生の矢部さんは卒業と、ラベル転記の出来る方が居なくなり、思案の末、植物ボランティア星野さんに協力を仰ぎ、上記の活動を「Fungi」、「日本菌類誌」、「菌類図鑑」、「日本植物誌」、「日本植物図鑑」を参照しながらラベル転記作業を星野さんと石田が行い、齋藤さん、外山さん、丸山さんが封筒折りとラベル添付、標本詰め作業を「先生がお帰りになるまで頑張ろう！」を合い言葉に、細々と繋げてきました。

いよいよ2015年4月「沖縄で採集した標本」をお土産に帰られた小林先生のご指導を受けながら、「今年度から全員が同じ作業をこなす！」という方針を掲げ、再度「パラタクソノミスト養成講座」を受講し、新人の高田さん、寺倉さんを含め登録者6名が月1回のペースで活動しています。

小林先生から「はかどりましたね」とお褒めの言葉を頂いた時は皆、達成感でいっぱいです。

7月初旬には耐震工事に伴う引っ越しのため、高橋先生のご指示を仰ぎながら、菌類保管キャビネット内が動かないよう詰め物をする作業を行いました。

最初に使った梱包用ビニールは効率が悪く、梱包段ボール用紙をカットし屏風畳みにすると、簡単に動かない事が分かった後は、はかどりました。

「せっかく効率の良い方法が見つかったのに、以後は使えませんね！」のお言葉でしたが、、ルンルン気分でした。

8月からはN311室において再度「沖縄で採取された標本」に取りかかり現在に至っております。

小林先生の存在は大きく、ボランティア全員がご指導を仰ぎながら、不安無く、安心して真剣に、同じ作業に取り組み、「今日は何分完成！」と各々達成感を味わいながら活動しております。

そして、活動後の情報交換は持ち寄ったお茶菓子を頂きながら和気藹々ともこれも又、楽しみなものです。

私たちの微々たる真剣な活動が研究者の方々の少しでも手助けに成ることを念じながら・・・。

<活動日時・場所>

○活動：月1回、ほぼ第3水曜日、午後1時～3時、
(3時～持ち寄りお茶会)

○作業室：総合博物館 N311 室



左より小林先生、高田さん、筆者、外山さん、齋藤さん
(撮影は星野フサさん)

移動後のポプラチェンバロと、エレーナさんのその後

ポプラチェンバロボランティア 石川 恵子

総合博物館の耐震工事に伴い、ポプラチェンバロは昨年4月11日から情報教育館に移動して、申し分のない良い環境で、夏のリニューアルオープン迄預かって頂いています。その件については、「北大総合博物館ボランティアニュース No. 37、6月号」に書かせて頂きました。チェンバロという楽器を良い状態に保つためには、良い環境に置くことが何より重要です。即ち温度湿度の管理と定期的に調律すること(メンテナンス)も大切です。

移動後は、暫く環境に慣れるまで不安定な状態でしたが、情報教育館の田中さんが温度湿度の管理に気を遣って下さり、チェンバロボランティアの新妻さんと私がほぼ週2回、交代でメンテナンスしていますし、雪田さんも時々参加してくれましたので、現在は落ち着いています。季節の変わり目には状態が安定しませんので、これからも気を抜かずに見守っていきたいと思います。

時間的に仕事で来られないボランティアの方が多いためと思われそうですが、今迄少人数ながらも何とか安定した状態を維持できているように思います。

博物館でのボランティアコンサートに来て下さっていた方々で、その後のチェンバロについて気に掛けてくださる方も多く、問い合わせが博物館に寄せられているそうです。博物館のリニューアルオープンを待ち望み、チェンバロでのコンサートを楽しみにして下さる方々がいらっしゃることは、有難いことで、期待にお応えできるよう、もう暫くメンテナンスにも務めたいと思います。

2008年10月から北大大学院理学研究科に留学され、金属の研究で博士号を取得され2013年9月ロシアに帰国されたエレーナさんとの交流については、「北大総合博物館ボランティアニュース No. 31、12月号」に書かせて頂きました。

帰国されてからは連絡がつかず、如何お過ごしかと気に掛かっておりましたが、昨年秋頃ご本人から当時の担当教員の松枝先生宛てに連絡があった旨、ボランティアの星野フサ様からお知らせ



情報教育館でのポプラチェンバロ (撮影は筆者)

頂きました。その後ご結婚され、お子様にも恵まれたとの朗報でした。

自宅に来られた時に結婚に関しての話題に触れた事がありましたが、「結婚は年齢よりも『縁』が大事」というように申し上げたことがありましたので、良縁に恵まれ、更にお子様も授かったことは何より嬉しく、安心いたしました。ご一家のご健康と末永いご多幸を祈るばかりです。

エレーナさんのように、研究や授業の合間に私のコンサートに来て下さり、「チェンバロの音色に癒されました。」と言ってくれる院生や学生の方もいらして、一時休み、又戻って研究や勉学に勤しまれることを思うと、少しでもお役に立てたのでしたら何より嬉しく思います。

約6年間の私のボランティア活動報告を担当の大原先生がホームページに載せて下さいましたので、お読み頂いた方にはご承知と思いますが、ボランティアコンサートには、市民道民の他、全国各地から、そして世界の多彩な国々からの来館者をお迎えしましたが、皆様様にチェンバロの由来や音色の美しい響きに感動して下さいました。

ポプラチェンバロが博物館にあったからこそ、毎回のコンサートで一期一会の出会いを楽しませて頂いたのだと思い、感謝しています。

ヤップ島からの手紙

図書ボランティア 久末 進一

ボランティアニュース 17 号（平成 22 年 6 月 1 日発行）掲載「ヤップの石貨」（久末進一執筆）記事に誘発されたミクロネシア連邦ヤップ島在住のヤップ州政府観光局の横山敬子さんから、このほど石貨の現地日よりがメール便で編集委員会に寄せられた。

大学院国際広報メディア・観光学院修士課程の社会人院生だったこともあり、横山さんは博物館収蔵展示の石貨についても見聞している。

直径 57 c m のこの石貨は円形に石灰岩鍾乳石を加工したもので、中心に棒通し穴が穿たれてある。両手でひとかかえもあり重い。

カロリン諸島西部のヤップ島（Yap Island、北緯 9 度 32 分、東経 138 度 7 分。4 島構成で面積 101km²）を含むミクロネシア連邦は、赤道から北緯 20 度、東経 130 度から 172 度の南洋海域にサンゴ礁の島々がなんと二千以上も散在する。

石貨は戦前、「拓殖学」の権威、上原轍三郎（1883-1972）が北海道帝国大学教授（昭和 2 年就任）時代に南洋諸島の産業調査途上、昭和 12 年 6 月、ヤップ島で収集、持ち帰って大学に寄贈していたものです。上原は幾多の著作や屯田兵制度等、北海道開拓研究でも著名な広島県人で、戦後、北海学園大学の初代学長（昭和 27 年）となる。札幌市南 1 条西 1 丁目に建立（昭和 42 年）された「札幌建設の地」記念碑に題字が遺っている。

これは戦前、日本が第一次世界大戦で英仏戦勝国側だったところから、ポリネシアがドイツ領から大日本帝国領（国際連盟委任統治領）に所属していたことによる。戦後は昭和 22 年からアメリカがミクロネシアの国連統治委託国となり、ヤップ

の石貨は国外持ち出しが厳禁となった。

「日本統治時代を知る年配者も少なくなったが、現地では今もなお石貨は重要な宝物として人と人との気持ちを結びつける役割を果たしている。」と横山さんは手紙で報告している。

「コミュニティ（地域共同体）の各集会所、博物館には大きな石貨が屋外に幾つも並んで飾られ、現地語で「ライ」または「フェ」と呼ばれている。いずれにも語り継がれた由来があり、隣接のパラオ島で産出される鍾乳石を採石加工し、ヤップ島までカヌーで運ぶ途中、海難事故で死ぬ者も多く、命がけの石貨ほど価値が高い。貨幣の貸借関係を越えて、儀礼的交換の象徴であり、結納や不動産売買、お詫びのしるしとか、例えば村を買ったり、島を買ったり、この取引にはこの石貨を使うといった約束、償いの証となる。重いために所有権だけが移動し、石の場所はそのまになる。何でもお金で解決しようとする現代社会にあって、なお原始的社会の絆や先祖を敬う心が石貨に込められていることに感動する。知らずに石貨によりかかたりするのはもってのほかである。（以上要旨）」という。

最近では温室効果ガス排出問題（COP21）で島嶼国側の地球温暖化危機も取りざたされる。大陸氷河が溶けるなどによる海水面の上昇で、島もろとも石貨が水没する羽目になる悪夢は嫌である。

ヤップからの手紙に感謝しつつ、熱い太陽輝く石貨と裸の島、南海の楽園の青い海と空に思いを馳せ、しばし寒さにこごえる季節を忘れ、春三月をことほぎたい。

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 40

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：星野、今井、大山、児玉、沼田、山岸）
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2016 年 3 月 1 日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>